

四島の架け橋～得能さんの想い～

宮崎第一中学校
多田 純哉

納沙布岬から見た歯舞諸島

今回の研修の2日目に、日本本土の最東端である根室市の「納沙布岬」へ行った。最も印象に残っていることは、そこから見た北方四島を眺めたことである。わずか3.7kmの距離にある歯舞群島の「水晶島」が見えた。北方四島は自然が美しく、それは納沙布岬から見ても明瞭であった。

その北方四島は1945年からソ連によって不法に占拠され続けている。8月28日から9月4日にかけて、日ソ中立条約を破りソ連が四島に侵攻した。それから約2年島民はソ連兵とその家族と生活を共にしたが、昭和22年、ソ連兵は一方的に日本への引き上げを通告した。17000人の島民は自己所有の家屋や船舶、財産のほとんどを放棄させられ、所持品制限までされた上で故郷の島を追われた。これが**強制送還**である。さらに引き上げの際は、**荷物の積み下ろし用の網にひとまとまりに入れ、それをクレーンで吊るして船倉に下ろす**という危険で、非常に非人道的な方法だったという。

78年経った今も北方領土は返還されていない。現在も返還要求運動が続けられているが、すぐに返還される兆しは薄い。ウクライナ情勢が深刻化して日露の関係に亀裂が入り、交流さえもできない中、私達にできることは一体なんだろうか。考え方は様々だが、私は「**一人でも多く領土問題について考えさせる**」事が重要だと考える。**北海道だけの問題ではなく、日本全体の問題だということ**を、**一人の日本人として自覚する**ことが、解決への糸口だと考える。

国後島の自然



北方領土の位置



四島返還の象徴「四島の架け橋」

得能さんの怒りと悲しみ

北方四島の島民の悲しみを描いた映画「ジョバンニの島」の主人公のモデルである得能宏さん(90)は、色丹島の島民であった。13歳の頃に、ソ連から樺太への強制送還を強いられた。「**収容所での生活はすごく大変だった。死ぬのが先なのか、日本に戻るのが先なのか、生きるだけで精一杯だった。**」と仰った。



得能 宏さん

戦後、沖縄本島は1972年、小笠原諸島は1968年に日本に返還された。「次は北方領土だ!」という気持ちでいたが、未だに叶っていない。日本政府に対しては、「**国の問題なのに、消極的であり、まるで他人事である。**」と怒りを露わにされた。また北方領土でのロシア人との交流・「**ビザなし交流**」も、コロナ禍やウクライナ戦争によって絶たれた。故郷にある祖父のお墓参りさえできない。

「**この怒りと悲しみを若い世代に語り継いでいってほしい。そして北方領土は日本の、皆さんの国だということを忘れないでほしい。**」と想いを託された。一刻でも早く四島が返還されるよう、私達若者が声を上げ続けなければならない。そう感じた貴重な時間であった。



北海道(左)と宮崎(右)の太陽光パネル。緯度が違うため、太陽から受ける光量が違うので、角度が大きく違う。



ロシア語併記の標識。ロシアが身近にあることがわかる。

北海道から見た景色(上)/意外な写真(下)



日本本土の最東端・根室市は北緯3度・東経145度である。宮崎市が東経131度なので、**時差は約1時間弱**である。上の写真は一見普通の日の入りに見えるが、**撮影時刻は15:45**である。また宮崎と違い、**山が多くなく、空が広大**なのも地理的特徴の一つであると言えるだろう。



下の写真は、戦前の国後島での運動会の様子である当時の人口は**7400人**と、**四島の中で最多だったため、地域の活動も活発だった**という。当時の島民の人たちも、私達と変わらず、**平穏な生活を営んでいた**のである。その生活が残酷にも奪われたと考えると、胸が痛む。

研修の感想

研修に参加する前は、私は領土問題について消極的な態度でいた。だが実際に島民の方のお話を聞き、たくさんの物を見て、学んでみて、私も一人の若者として情報発信していかなければならないと感じた。また、「**北方四島に住んでいるロシア人は申し訳ない気持ちにならないのか**」と感じていたが、「**住んでいる人は悪くない。ロシア政府が悪いんだよ。**」と得能さんから言われ、考え方が変わった。おそらく私のような考え方をしている人も少なくないだろう。その人達に得能さんの言葉を教えたいと思った。これからの地域への参画も積極的に行きたい。



道東の動物。キタキツネ・エゾシカ・タンチョウ